緋石物語

新庄香那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋石物語

【Ｎコード】
Ｎ０７５０Ｐ

【作者名】
新庄香那

【あらすじ】
天上界、地上界、地獄界の３層異世界を舞台にしたファンタジー冒険小説。

３年前、天上界に存在する謎の宝玉「緋石」が、「赤い悪魔」により強奪された。警備にあたっていた天使「アーサー」はこの事件により兄を亡くし、自身も天上界より追放され地上に降りる。

アーサーは、地上界で神父として暮らしながらも、緋石の謎とそれ

を奪った赤い悪魔を追い続ける。そしてある日アーサーは、緋石の謎を知るため、エルフの村を目指して旅にでる。その道中に出会った少年「アシュリー」とヒューマンウルフ（オオカミ人間）の「ベル＝ルイ」と共に、エルフの村に辿りつくが…。

そしてその頃地獄界では、悪魔たちが緋石の力により強大な力を得ようとしていた…。

プロローグ　夕暮れの丘

小高い丘の上に立つ古い教会。レンガで組まれた非常に古い建物である。教会といっても、その目的を果たしていたのは数十年前までである。最近では、ただ朽ちるのを待つ建造物――もはや廃墟と呼ぶべきであろうか――と化していた。

その廃墟が再び教会の様体を取り戻したのは三年前ほど前のことである。アーサーと名乗る大柄の男が、国政官として土地や戸籍を管理している私の元を訪ねてきて、廃墟を含む土地の一帯の買い取りを申し出たのである。私は最初こそこの見知らぬ男を不審に思ったのだが、「教会の復興」という高尚な目的にケチを付けるべくもなく、土地の買い取り許可をおろした。彼はすぐに荒れ切った内装を完全に補修、外壁のすべてをも白く塗装し、挙句には自身が神父となりそこに居ついたのである。

その間私は何度か、補修の進捗の確認などの目的で彼を訪れたのだが、彼は最初の印象よりずっと穏やかで博学な男であった。ついでにいえば予想したよりずっと若かった。しかし年齢のことも含め、第一印象は逆であった。浅黒い肌や大柄な体格、口数の少なさがそうさせたのだろうか。私もまだまだ人を見る目が未熟である。

彼が白く塗った教会のその外壁は、地平線に沈もうとしている太陽の光を受け、夕暮れの景色の中でもとりわけ赤く染まっている。神装から着替えたのだろうか、民族衣装のような軽装を身にまとい、彼は赤い壁によりかかって天を仰いでいた。

「元気かい、アーサー。」

こんな赤い夕陽の出る日には、彼は良く物思いにふける。そのことも、その理由も、私は既に知っていたから、彼に声を掛けるのを

少しためらったのだが、そうも言ってはいられない。急な用件があっての訪問だ。

「ああ、ブラームスか。その顔だと、今日は仕事の話かな。」

彼は皮肉っぽい笑みを浮かべてこちらに歩みよった。彼は私よりよっぽど人を見る目があるのだろうか。と、いうよりかは優れた観察眼であろう。大体いつも、顔色ひとつ伺って、こちらの用件を見透かしてしまう。

今の私と彼の関係は実のところかなり複雑である。この三年の間に、お互いの理解は随分と深まったのだ。最近では、良き友人として杯を共にすることもしばしばある。それ以前は、この古都「セントブルネス」の土地に慣れていない彼の面倒見をしていたため、どこか兄と弟のような信頼関係も出来あがっている。しかし、今日は別のところ、クライアントとして彼を訪れている。

「ああ、それも今回はちょっとばかし骨の折れる仕事になるかもしれん。」

彼が神父を務めているのは趣味というか、副業のような意味合いが強い。実のところ彼の本来の職業は請負型の冒険家である。そして私がその大口の依頼主だ。

冒険家などというと大それて聞こえるが、この大陸でいう冒険家とは詰まる所「なんでも屋」である。未開地の開拓や新種生物の探索・捕獲など、それらしい仕事を専門にする者もいるが、稀有である。

細かく言うとキリがないのだが、冒険家をおおまかに分類するのであれば、「ナイト」「シーフ」「マーセナリ」「プリースト」などが挙げられる。

国からの依頼を受け、戦争やモンスターの討伐などを行う冒険家を総称して「騎士（ナイト）」などと呼ぶ。国が独自に備えている軍隊はその活動を行う際に逐一国の許可を必要とするため、機動力の面で難がある。そんな穴を埋める存在なのであろう。

よくこれと対にされるのが「傭兵（マーセナリ）」だ。彼らはより貪欲というか、依頼主にこだわらず、活動の幅が広い。ちょっとした警備や部族間抗争の補助など、個人や企業・小数民族などといったレベルのクライアントを持つ。

冒険家の中には、貴重な宝玉類の探索や遺跡の盗掘などを生業とする連中もいる。国政に関する機密情報の収集や、人攫いなど、汚れ仕事をも請け負う辺りを皮肉って、彼らを一般に「盗賊（シーフ）」などと呼ぶ。

慈善的な活動を好む冒険家は「神官（プリースト）」に区別される。例えば薬の原材料の収集であるとか、犯罪者の捕獲などがメジャーなところであろうか。アーサーは博学で力量もあるから、仕事の幅は広いが、あえていうならばこれに当たるだろう。

とにかく、彼がこのセントブルネスの街に移住してきたのは、ここが比較的人口が多い都市で、比例して冒険家の重要が多いからであろう。また、都市としての歴史も非常に古く、さまざまな伝説や神話の由来地であることも彼にとっては大きな利点のはずである。何せ彼には、目的がある。

「君の探しモノにも関わりがあるぞ。」

「…聞こう。」

私はアーサーに仕事の要旨を伝え始めた。

プロローグ　悪魔の唄

「エルフの村か…確かに難儀なものだ。」
アーサーはうす暗い森の中、小声でつぶやいた。ブラームスの依頼というのは、エルフの村の探索であった。

エルフは人間に近い形容を持つ種族である。知能・体力・寿命、そのどれをとっても人間より優れているらしい。しかし非常に閉塞的な種族であり、他の生物、特に人間とはあまり関わりを持とうとしない。アーサー自身もエルフと交流を持ったことはないので、そこらへんの事情はあまり詳しくない。
古都セントブルネスから西に行ったところに、グレイフォレストという名の森がある。非常に広大な森で、旅の者を苦しめる秘境でもある。先人たちの苦労もあり、なんとか隣町と古都をつなぐ林道のようなものが拓かれてはいるものの、固有種のモンスターなども多くいるためとても安全とは言えない。　「未開の森（グレイフォレスト）」――――危険溢れるこの森のどこかにエルフの住む村があると言われているが、古都周辺に非常に詳しいブラームスですらその場所を知らないわけであるから、林道沿いになどまず無いのであろう。

アーサーはブラームスの依頼の全部を聞くと、すぐに教会を経った。そのため出発は夕方であり、森に入った頃には既に日が沈み始めていた。
当のブラームスですら翌朝の出発を薦めたのだが、アーサーはそれを無視して森に入った。夕日の赤さが彼を焦燥に駆らせたのであろう。

あの日の記憶を彷彿とさせる、ひときわ赤い夕日が。

――四年前、天歴２０００年。天上界。

二十歳になったアーサーは、天上警備隊に入隊した。

この日、アーサーは宮殿の警備にあたっていた。この宮殿は、地上界でいう国会議事堂と博物館、それと教会を、すべてひとまとめにしたような建物だ。政を行うための施設や、天上界の貴重な宝玉・文献の保管庫、そして礼拝堂などが存在する。

それだけに、ここの警備は厳重であり、警備にあたる天使も選りすぐりの精鋭たちであった。

本来であれば、この宮殿の警備隊に新人であるアーサーが参加することなどまずありえない。しかしこの日は奇しくも、天歴２０００年を記念して地上界で大きな祭典が執り行われる日であった。天上界からも優秀な天使が多く地上に派遣され、大陸各地で開催される祭典の警備にあたっていた。したがって、この直近の一週間ほどは天上界も人員不足の状態にあり、新人の天使にも比較的重要な仕事が回ってきていたのだ。

アーサーは新米とはいえど、同期の中では頭ひとつ抜きんでた実力を評価され、臨時でこの隊に派遣されてきた。彼の血筋や生い立ちも抜擢の理由になったのだろう。もともと天使という種族は魔法の扱いに長けているのだが、その中でもアーサーの家系は緊縛系呪文の祖として広く知られていた。つまり、警備という任務に適正が高かったということだ。

もうひとつ、彼の兄の存在がある。バイスという名の、非常に優秀な天使である。バイスはアーサーよりも十歳も年上であった。幼いころに両親を失くしたアーサーにとって、バイスは兄というよりは父に近い存在で、親しみというよりも憧れの感情が勝っていた。

バイスは史上最年少で天上界一の精鋭部隊「特別機動一課」の試験に合格。以来多くの実績を重ねてきており、いまやアーサーのみならず多くの天使が目標とする人物になっていた。
その彼にとって、宮殿警備隊は「古巣」であった。人員不足を聞き付けたバイスは、この期間だけ、宮殿警備の特別顧問として古巣に帰ってきていたのである。任務で天上界全土のみならず、地上や地獄界までをも往来するバイスにとって、この警備期間は弟の成長した姿を一目見るチャンスであった。彼は弟の派遣入隊を申請した。身内ということあって、難しいものがあるかと睨んでいたが、意外にも議会の承認はスムーズであった。そのことからも、アーサーが信頼を得るに足るほどの力を付けてきていることが十分伺えたが、やはり彼にも親心が芽生えていたのだろう。一度でいいから任務を共にしたかったのである。

「兄さん！」
久々に聞くアーサーの声は少し大人びていた。

「…まったく。任務中だ。隊長と呼べ。」
バイスはわざとっぽく、皮肉を込めた笑みを浮かべたが、どこが穏やかな表情でもある。

「はっ。失礼いたしました隊長！本日、臨時で宮殿警備を任されましたアーサーでございます！このような重大な任務にあたるチャンスを頂き、誠にありがとうございます！」
正式な敬礼と共に、アーサーは声を張り上げた。

「ああ。実力を裏付けるのは実績だ。しっかりと、頼んだよ。」
バイスも彼に向き合い、敬礼をした。

そして、そんな兄弟に近づく影が２つ。

「がっはっは！見ろよプロテス！」
「私達は非番みたいなものなんだろうな、今日は。飲みにでも行くかライルよ。」
兄の元同僚で親友の、ライルとプロテスタントであった。緊縛呪文のエキスパートであるバイス、強力な攻撃魔法の使い手ライル、治療魔法や対魔結界魔法を操るプロテスタント。悪魔も恐れる宮殿の三天使として名を馳せたトリオである。現在では、バイスは特別機動一課に、ライルは天上界の軍備を司る軍部庁の総監、プロテスタントはモンスター討伐を専門に扱う特別機動三課の参謀長としてそれぞれ活躍している。彼らも、バイスの指名を受け、期間限定で宮殿警備に復帰したのだ。

「クックック。相変わらずだなお前らも！」
アーサーに向けた笑顔とはまた別の、懐かしみにふけるような微笑みを浮かべバイスは言った。

「しかし…お前らにはお前らの仕事があるだろうが。」
バイスはその表情を怪訝なものに変え、続け様に言った。バイスにはアーサーとの邂逅以外に、もう一つの狙いがあった。この日はアーサーのみならず、経験の浅い天使が多く宮殿警備にあたっていた。そのため、ライルやプロテスタントにも小隊を組んで任務にあたってもらい、それぞれの分野で有能な若い天使を発掘してもらおうというものだ。バイスにせよ他の二人にせよ、ある程度の実績と信頼を積み重ねてきている。自身を高めるのも大切ではあるが、その後重要になってくるのはむしろ次世代の育成と継承である、とバイスは考えている。歳の頃は三十。引き継ぎを考えるにはさすがにまだ若いが、弟子を取り始めるにはいい年齢だ。

「はいよっと。妙にお堅いところも変わらないな！がっはっは！」
ライルは大口を開けて笑いながら軽く返事をする。総監などとい

う重役に就いても豪胆さは衰えていないらしい。

「三課は慢性的に人手不足だからな…優秀なのがいたら遠慮なく引き抜かせてもらおう。」

プロテスタントは昔から変わらぬ物腰柔らかな口調で答える。

しばらく三人の歓談が続いた。アーサーにとっては兄のみならず親友の二人も常に尊敬してきた相手である。兄、そして兄の親友との邂逅は胸を踊らすものがあったが、彼は新人の身分をわきまえ、自分を諌めた。

「では隊長方！自分は定時巡回を行なってまいります！」

――――数回の定時巡回と、隊長への報告を繰り返しているうちに日が暮れ始めた。

普段よりも人気の少ない宮殿は平穏そのものであった。天上界には雲はない。地平の先で沈もうとしている太陽の光を受け、白塗りの宮殿は赤くそびえ立っている。渡り廊下を巡回していたアーサーは少し立ち止まり、その光源を見つめた。特別な日だったからであろうか、見慣れてるはずの太陽が、今日はいくばくか赤みを増して見えた。アーサーは再度歩き始める。

議事堂のある宮殿本棟から、離れの棟にある「奉石堂」の大扉までを繋ぐ長い廊下には、床と天井を貫く太い支柱が定間隔に配置されている。その根から真っ直ぐに伸びる影の黒と、赤く染まった床のコントラストが美しい。

影と光の成す段だら模様を眺めながら、その上をさらに少し歩いた。

規則正しかった赤と黒の段だらの中に、異変を見つけた。
赤い床の上に、さらに強い赤。まさに「真紅」とでも形容すべきような、水玉模様が続いていた。
「おや…。」
少し視線を先に移す。その真紅は、直線的な柱の黒い影と相反するように、ふらふらと蛇行しながら廊下の先に続いている。
「！」
アーサーはその真紅の正体に気付いた。
まさにその瞬間である。アーサーの向かっているその先から、何かを突き破るような轟音と、明らかに肉体的な苦痛を伴った天使の叫び声が響き渡った。
「この先は…奉石堂だったか！」
アーサーは長い長い廊下の先を目指して走り始めた。真紅の「血痕」を追って。先ほどまで美しく見えていた赤い太陽が、途端に不吉な印象に変わった。
奉石堂――――アーサーがその名を初めて聞いたのは養成学校での天界史の講義の最中である。宮殿を成す五つの棟の中のひとつに、貴重な宝玉類の管理に使われているものがある。その棟の最奥に、「緋石」という宝玉のみを祭った奉石堂なる部屋が存在すると聞いた。
議事堂のある本棟、最も巨大な建物である。渡り廊下で繋がるその北には、礼拝堂を備えた北棟、対して南には軍事品の保管を目的として建てられた南棟が存在する。日出る方角、東には史書や文献

が貯蔵された東棟、日の沈む西の方角には件の奉石堂を含む西棟がある。
西棟は入隊直後の見学でも訪れているし、今日の警備でも何度か巡回に行っている。数多くの部屋があり、それぞれに種々様々な宝物類が保管されている。その中で奉石堂は異質――――見学も許されず、その大扉は他と比べても遥かに強固な作りとなっている。しかし、天上界の天使はみな、そこに何が祭られているか知っている。

「緋石」。
奉石堂に祭られた謎の宝玉。
緋石を護ること。それが天上界の存在理由であると小さな頃から教えられてきた。しかし、緋石とは何かとか、どんな宝石なのかとか、そういった一切を知る人物は滅多に居ない。おそらくそれを知るのは、長老レベルの大天使と一部の研究者のみなのであろう。緋石…それが謎のままであること自体が、緋石を護る上で重要な役割を持つだからだ。どんな価値があるのかわからない代物を、危険を冒してまで奪おうとする輩は稀有である。一般の天使たちが教わるのは、緋石の謎ではなく、緋石の護り方のみである。

奉石堂へ走るアーサーのその横に、不意にバイスが現れた。『エバンキュレイション』という転移魔法を用いたのであろう。予めマーキングを掛けておいた人物のもとに、一瞬で空間転移する高等魔法である。バイスの隊は巡回警備が任務であったから、彼は小隊に属するもの全てにマーキングを施しておいたのだ。『ポータリング』という、より簡単な転移魔法もあるがこれは定点への移動しかできない。こちらであればアーサーもなんとか使用できるのだが、汎用性でエバンキュレイションに遥かに劣る。

「今の叫び声に心当たりは？」
走りながら横目でバイスは尋ねた。

「いや…わからない！先の巡回時には血痕も含めて、異常はなかったはずだよ！」
アーサーは答えた。

「奉石堂か…戦闘もあるかもしれん、気を抜くな。」
踏んだ場数の差であろうか、バイスは至って冷静である。

「兄さん、俺は何を！」
頼れる兄の姿を見て、少し冷静になったアーサーは指示を求めた。

「負傷者がいればその保護と治療を最優先に。そうでなければ…俺の補助だ。」
バイスは素早く返答する。それを聞きアーサーの表情はやや曇った。あの叫び声で要救助者がいないということは考えにくい…可能性があるとすれば、声の主が既に死んでいる場合のみであろう。

「それと…」
バイスは続けた。
「任務中だ。隊長と呼べ。」
いつもと変わらぬ、皮肉っぽい笑みをこちらに向け彼が言った。
アーサーの委縮を気遣ってのことであろう。

南棟に到着する。予想通りであり、そして憂慮すべき事態であった。最奥にある奉石堂の大扉は破壊され、闇が口を開けている。棟の入り口には負傷した天使が一人、横たわっていた。別隊の若い天使である。確か廊下の定点警備にあたっていたはずである。おそらくは血痕の主だろう。なんとか敵を追ってきたのか、引きずられて連れて来られたのか…負傷の具合や擦り切れた衣服から察するに後

者であろうか。
「悪魔だ…奉石堂に入っていった…。」
苦しそうな口調で彼は言った。

「お前の『ヒーリング』では手に負えないか…」
バイスは尋ねた。アーサーは幼いころから回復系の魔法が不得手であった。兄もそれは重々承知している。アーサーが返答するより先に、真横の空間が歪み、プロテスタントが現れた。『コールパーソン』――の詠唱破棄。彼が用いたのはエバンキュレイションと対をなす転移魔法である。自身が移動するエバンキュレイションに対し、こちらは他者を呼び寄せる魔法である。当然誰でも使える魔法ではない。それを、本来追うべき手順を大幅に省略して発動させてしまうのだからバイスの力量は計り知れない。

プロテスタントは無表情のまま辺りをぐるりと一周見渡す。
「ふむ。ある程度状況は察した、お前は敵を。…そうだな、彼の治療と、伝令は任せてもらおう。西棟入口に一方向結界を張るのが定石かな?」
「ああ、それで頼む。ライル隊は二次襲撃に備えるよう伝えてくれ。」
「了解。では巡回警備の連中を応援に当てよう。」

不測の事態にも関わらず二人のやりとりは迅速そのもの。まさに以心伝心と言えよう。長年の任務の中で、培われてきた信頼関係が垣間見えた。無論、アーサーは展開についていくのに必死である。

「行くぞアーサー。」
しかしバイスの指示だけは、混乱しつつある頭の中にもスムーズに入ってくる。二人は立ち上がり奉石堂内部へ走った。

奉石堂の大扉の脇にはさらに二人、警備の天使が倒れていた。が、こちらは既に事切れていた。大きな傷口に畏怖の念を感じそうになったのでアーサーは目を逸らした。

破壊された大扉をくぐるようにして奉石堂内部へ入る。巨大の一言に尽きる空間がそこにあった。石ひとつ奉るにしては大きすぎる部屋だ。正面にはこれまた大きな祭壇がそびえ立っている。装飾は至ってシンプルなものであるが、やはりこれほどの規模の祭壇となると何か神々しいものを感じさせる。

その祭壇の少し手前に、隆々とした筋肉を持つ悪魔が立っていた。体躯は逞しいがその全容量は大きくはない。むしろ人間の少年くらいの大きさである。その不自然なアンバランスさが奇怪で恐ろしくもあった。そしてその右の手には、おそらくはあれが緋石であろう、手のひら大のゴツゴツした石が握られていた。緋石を片手に、こちらを見つめ挑発的な笑みを浮かべる悪魔のその足元には、さらにもうひとり天使が横たわっている。うめき声をあげているから、彼はまだ生きているだろう。

「俺があいつを引きつけるから、お前は彼を保護しろ。可能なら敵の動きに注意を払いながら治療に当たれ。出来るか？」

「ああ、兄さんも気をつけて。」

そのやりとりの後、バイスと悪魔が同時に動きだした。それを受けてアーサーも負傷した天使のもとへ駆け抜ける。その間わずか数秒であったが、バイスと悪魔は既に、お互いの間合いを保ちながら手の内を探り合うように対峙している。

不得手とはいえアーサーも十分な魔力を持つ天使である。彼の回復呪文は、徐々にではあるが確実に負傷した天使の傷を癒していっ

た。数か所の骨折と裂傷に対し、順々に処置を施していく。それぞれ傷は重くはないが、数が多い。やはり全集中力を向けてしまっていたのであろう。結局アーサーは数分の間、隙だらけの状態で治療に当たっていた。

ふと、バイスの指示を思い出して悪魔の動向も確認した頃のことだ。しまったと思い、辺りを振り返ると、バイスの緊縛呪文に縛られ制止しきった悪魔の姿と、それに歩みよろうとするバイスの姿が目に入った。

バイスの体にも数か所の負傷が見られたがどうやら大した怪我ではないようだ。バイスが用いたのは『セイントプリズン』。対象者を光の立方空間に閉じ込め、身体的な自由をすべて奪う最上級の緊縛呪文である。天使といえども、あのレベルの緊縛魔法を習得できるのは彼らの家系の人間のみであろう。威力の強大さの源は膨大な量の魔力消費である。それだけに大きく疲労している時や負傷時には扱えないはずだから、それが発動してる以上は兄の身の無事は確かである。

バイスは悪魔を包む立方空間におもむろに手を突っ込み、悪魔の握っている石を取り上げた。それをされても悪魔はぴくりとも動かない。最初に見せた不気味なほほ笑みはすっかり消えている。どこかの一点、おそらくは緊縛される前の瞬間、対峙するバイスが居た位置なのであろう、――――を見つめたままロウ人形のごとく固まっている。

アーサーはバイスの元へ歩み寄り始めた。そしてバイスは、取り戻したその赤い石を、アーサーに向けて軽く掲げた。アーサーはそれを見て、緊張の糸が切れたのか、歩みを止め座り込んだ。

やはり唯一の肉親である。アーサーは兄の足手まといにならんと

必死であったし、バイスもまた、未熟なアーサーの身を気遣いながらの戦闘であったから、お互いの無事を確認して気が緩むのは仕方のないことだ。初陣のアーサーはともかくとしても、この時ばかしは、百戦錬磨のバイスですら周囲への警戒が虚ろになった。

――思い返せば、気づくべきであったのだ。

大扉の前で事切れていた二人の天使に残された禍々しい傷跡は、アーサーが治療した天使の傷とは比べようもないほどのものであった。巨大な刃物のようなもので一瞬にして身を裂かれ、苦痛を感じる間もなく絶命するような、そんな傷であった。

そしてあの大扉。厚さは数十センチにもなり、その尺も4～5メーター程ある巨大で堅固なあの扉に、ぽっかりと口を空けた大きな穴。

どう見積もっても、檻の中で固まっている小さな悪魔にできる芸当ではなかったはずだ――

赤い石を持ったバイスの左手が振り上げられた瞬間。緊張の糸が解けたアーサーがその場に座り込んだその瞬間である。

どちらが先であったか――バイスの表情が強張り、身を翻してそれをかわそうとしたのが先だったのか――彼の左の二の腕から先が、本来あるべき接続を断たれ宙に舞ったのが先か――アーサーの時間感覚を遥かに超越したスピードで、その刹那のやりとりは行われた。

しかし次の瞬間アーサーは既に立ち上がり呪文の詠唱を始めていた。実のところ、状況の理解は追いついていなかったのだが、脳や神経より先に筋肉が反応を起こした。理解も、感情も、完全に取り

残されていた。しかしアーサーの体の動きだけは、本来追いつくはずのないレベルに達している二人の速度を追従していた。
「赤」は生物に警戒心を与える色である。天井から舞い降りてきた巨大な悪魔の皮膚の色と、無造作に宙を舞う左腕が撒きあげる鮮血。その先に握られた謎の赤い石。それらの圧縮された一瞬の情景がアーサーの視神経から入力され、肉体の持つ潜在的な力を増幅し、引き出したのかもしれない。

全て合わせて、数カンマ秒の間の出来事であろう。すんでの所でそれの気配を察知した兄が回避体制に入ったことも。天上に身を貼り付け気配を断っていたもう一体の悪魔が、振り降りざまの一撃で兄の左腕を引きちぎったことも。極限の緊張と恐怖の中、アーサーが自身の持つ最強の魔法を悪魔に向かい放ったことも。そして――――アーサーの両手から放たれた青白い稲妻が、兄の体を貫いたことも。

先ほどの…手下の悪魔とバイス、そしてアーサーのやりとりを、天井に身を潜め伺っていた赤い悪魔にとって、アーサーは視野外の存在のはずであった。油断をつき、バイスに致命傷を与えさえすれば、あとはすべてどうとでもなる。それが赤い悪魔の評価であった。しかし、アーサーが極限状態で放った一撃は、赤い悪魔の予想の外、警戒すべき威力であったのだ。だが運が味方した。なまじ、回避体制に入ろうとしていたバイスは、悪魔の爪の一撃でさらに左腕を奪われ、完全に体のバランスを失くしていた。その場に倒れこむまでの刹那、バイスは自身の体の制御権を失っていた。
悪魔はバイスを斬り付けたのと逆の腕で彼の体を鷲掴みにし、アーサーの放った稲妻の軌道上に彼を放ったのだ。非常に際どい一瞬の出来事であったが、すべて悪魔の目論見通りに事が進んだ。アーサーの魔法が悪魔に届く寸前のところで、放り出されたバイスの体が盾となった。

まさに全精力を込めた一撃であったのだろう。自然、アーサーの視界がボヤけ始める。それでも自身の放った魔法が兄の体を貫く悪夢のような景色だけは鮮明に、脳裏に焼き付けられた。放り出されたバイスの体と、力を使い果たし倒れこむアーサーの体が、ほぼ同時に床に伏せた。それを確認した赤い悪魔は、主を失った左腕を拾い上げ、その先にある赤い石をおもむろに奪い取った。

「…〜♪〜♪」

アーサーの意識は朦朧としていたが、確かに聞いた。赤い悪魔が、陽気な調子で鼻唄を歌い始めるのを。耳はかすみ、視界もボヤけているが、やりきれない怒りが彼の体を動かした。ずるずると、彼は悪魔に向かって這いずった。悪魔はそれに気づき、彼を一瞥したが、その大きく裂けた口で一度だけニタリと笑うと、彼と反対方向へ向かい歩き始めた。鼻唄は続いている。魔法の詠唱なのだろうか、次第に空間に黒い歪みが生じ始めた。その歪みは徐々に穴のような様体を成し、果てには直径3メートルほどにまで広がった。おそらくは地獄界へ繋がっているのであろう。手下の悪魔をかたに担ぐと、赤い悪魔はその穴へ入っていった。

次第に鼻唄が遠ざかる。その不快な唄が聴こえなくなる頃には、黒い穴も消滅していた。

「…アーサー…。」

尊敬する兄の声が、彼を呼んだ。

「に、兄さん…！兄さん…」

再度、アーサーは床を這う。今度は怒りではない。兄の体にまだ魂が居ついていることが彼に希望を与えた。ずるずると芋虫のよう

に、兄の元へ這っていく。兄の、腕の残っている側に倒れたのが幸いであったか。アーサーは手を伸ばし、兄の手のひらと自分のそれとを重ねる。

「だ、大丈夫か兄さんっ…今プロテスのおじさんを呼んでくるから…！死なないでくれ…！」

ただでさえ虚ろに揺れている視界が、溢れる涙のせいで余計に不鮮明になる。

「さっきの一撃…見事だった…。…さすが…自慢の弟だ…。」

憧れの兄からの賛辞である。なぜこんな時にとは思いつつも、涙が止まらない。

「ああ！でもまだまだなんだ…！兄さんから教わりたい魔法もあるんだよ…！」

アーサーは必死に嗚咽を抑え、声をあげる。

「…アーサー…」

仰向けの兄の表情は読み取りにくいが、この時の表情はすぐにわかった。兄が自分にだけ見せるあの笑顔だ。

「兄さん…！」

振り絞って出て来た声は、それだけだった。

「ふふっ…任務続行中だ…隊長と…呼べ…」

皮肉交じりの…あの、いつもの笑顔。

プロローグ　落翼の天使

――明くる年。同日。
天歴はひとつ積み重なり２００１年となっていた。
天上界の最果て。ブリッジフォードの地に彼は居た。

「本当に行くのか…？」
プロテスタントは尋ねた。

「ああ。」
アーサーは俯き加減のまま答えた。

ここ数ヶ月、幾度となく行われてきたやりとりだが、それも今回が最後であろう。
「ライルおじさんに宜しく頼むよ。」
アーサーは無理に少し微笑んで言った。

いつぞやまではプロテスタントとともにアーサーを引き止めてきたライルだが、彼は短気だ。少し前に、頑なに意志を曲げぬアーサーに対し一喝を投げ飛ばし出ていって、それきりである。

「ああ…」

プロテスタントはそう答えて、その歩みを止めた。アーサーの背…片翼となったその背中が、次第に小さくなる。彼も気付いてはいるだろうが、振り返りはしない。

――ここまでか―

「すまないな、バイス…。」
プロテスタントは空を仰ぎ、懺悔する。

件の襲撃事件以来のこの一年、天上界では混乱が続いていた。事件直後こそ、襲撃犯の詳細の調査や事後処理などで忙しかったが、しばらくすると議論の白熱が起こる。とどのつまり責任問題である。

事件概要がまとまらず、憶測飛びかっていた時期はまだよかった。それまでの名声と相まって、バイスを英雄視する風潮が強かったからだ。その頃アーサーは、兄を死なせたショックと自己嫌悪からひとく狼狽し、床に伏せていたが、それもまた「名家の兄弟」の奮闘というような形で噂が広まった。同情や憐れみもあったのだろう。

しかしそれも一時的なものであった。バイスの直接の死因、それがアーサーの放った一撃に依るものだという事実が公衆に広まると、批判の矛先は彼に向かう。新人には荷が重かったのでは。バイスにとって弟は足手纏いであったのでは。彼一人であれば緋石を守れたのでは。そういった見解が噴出する。

だが、これも経過の話である。世論はそう単純に収束しなかった。その「戦犯」アーサーを、隊に推薦し、引率したのが当のバイス本人とあらば事がさらに複雑になる。兄弟という血族関係も槍玉にあげるにはもってこいだ。議論は熾烈を極めることとなる。収賄の有無だとか、不正着任だとか、当事者からすれば的外れも甚だしい憶測もたびたび飛び交った。

プロテスタントやライルはよく奮闘した。彼らにとって、バイスは親友でありよき好敵手であったし、アーサーはまさに弟分。悲痛極まりない別れを遂げたその兄弟に、少しでも救いの手をと、尽力した。査問会議や対策委員会の集まりにことごとく出席し、彼らを

弁護した。ライルに至っては、渦中のアーサーを「売国奴」呼ばわりした宦官を殴り飛ばし、謹慎処分を受けるほどであった。

しかしやはり歴史的な事件である、彼らの力は遠く及ばない。議論は荒れ切ったまま、その勢い衰えることなく続いた。

そして結局、その議論の幕はアーサー本人が引くこととなる。施設での療養期間が明け、アーサーは査問会に召喚された。天上界全土が注目した議会である。その場に現れた彼は、監査官や長老からの審問を待たずして、次のように申し出たのだ。

――採るべき適切な対処を選べなかった。こと悪魔との戦闘時においては、自身の未熟さから冷静さを欠き、凄惨な結果を招くこととなった。至宝である緋石を奪取された責任のその全部は私にある。どのような処罰をも受け入れる――

ずっと前から用意してあった言葉なのだろう。彼は落ち着いた様子で、ただ静かに、そう述べた。その姿は、どよめく場内の中では余計に浮き彫りとなり、異様であった。

アーサーの申し出はその場で受理され、その後はまさしく事後処理といった感じになった。処罰についても諸論挙がったのだが、落翼ということで落ち着いた。これは、天使の翼の右の片方を落とすものだ。天使の翼は、その体内エネルギーの体外貯蔵庫のようなものである。鳥類のようにそれを用いて空中飛んだりとか、そういった機能は実は備えられていない。体細胞とは全く異なる細胞構造を持ち、神経が通っているわけでもないため、そぎ落とす際に痛みを伴うこともない。そして片翼を失っても、その分もう片方の翼が肥大化するだけで、事実上の不便という不便もない。しかし落翼は天使にとって非常に屈辱的な刑である。遠く古来より、神の使いとして知られる天使の描画には、その背に大きな二つの翼が描かれてき

た。翼は天使の象徴なのだ。それを落とされるということは、自分の存在そのものを否定されるようなものである。したがってこの落翼の刑は、天使の誇りを汚すような大罪を犯した者に執行されるものとして定められている。これより重い刑は極刑のみ。両翼を削ぐことで天使の力の全てを奪い、さらに天上界からの追放に処す「天界追放」の刑があるのみである。

だが、結局アーサーは、この落翼の刑の執行ののち、さらに天上界からの追放を自ら申し出ることとなる。追放天使として、天上界よりも地獄に近い地上界に降り、件の石の奪還を成すためとのことだった。しかし何も、望んで追放などという屈辱を受けずとも、手続きを踏めば天上界から地上界に降りることは可能なのだ。だがそれをせず、あえてこの手段を取ったのは、目的を成すまで天上界に戻らないという強い意志の体現なのかもしれない。議会としては、批判の矛先がはっきりした方が助かるし、それに対し重大な刑を処すことで体裁も保てる。そういった事情もあり、この異例の申し出もスムーズに認可に至る。

プロテスタントやライルは、「地上界での緋石の探索」などというのは口実に他ならぬと推察した。おそらくアーサーは、兄の名を汚すまいとの一心で、すべての罪をその身に受けたのだと。事実、アーサーの自覚の有無は別としても、これは概ね正しい。尊敬する兄に批判が集まるのは我慢がならなかった。

形式的なものとはいえ、追放という名目で天上界を一度去れば、よほどのことがない限りもう故郷に戻ることはできない。プロテスタントとライルの二人が彼を引き止めたのはそういった理由もあってのことだ。しかし彼の意志を変えることができず、とうとう彼が天上界を去る日が訪れる。

アーサーの歩むその先には、天上界と地上界を繋ぐ転送装置がある。門の形を成してはいるが、これは物理的なものではなく魔力によって形成された「出入り口」である。こちらも、２４時間体制の警備と、ある一定量以上のエネルギーを有す生命体の通過を防ぐ結界によって、厳重に管理されている。装置そのものは、数十年前に設置されたものらしい。転移魔法を得意とする天使族の長年の知恵によって完成されたものだ。それ以前はと言うと、移動の度、転移魔法のエキスパートが数人集結し力を合わせることで、対象者を地上に降ろした。装置による魔力増幅により、手軽に階層移動ができるようになると、今度は警備の面での問題が持ち上がる。そこで結界を得意とする天使らが主体となって、半永続結界を張ったのだ。若かりし頃のプロテスタントもこのプロジェクトに参加している。これにより、天使・人間・悪魔問わず、強力な力を有するものの階層移転が制限されるようになった。したがって現在、優秀な天使が階層を行き来する際には、一時的にその力を封じ込めることで通行を可能にする手法を取る。かのバイスも、特別機動一課に入隊して以来は階層往来の機会も多かった。アーサーも緊縛・封御系の魔法は随分と昔から得意としていたため、兄の階層の行き来がある度にこれの面倒をみるため、このブリッジフォードの地まで付き添ったものだ。むしろ、見送りと出迎えは、アーサーにとって兄と会う数少ないチャンスでもあった。

したがって皮肉なことにも、今アーサーがゆくこの道も、彼…いや、彼ら二人兄弟にとっては思い入れの強い場所である。責任問題の渦中とあり、公の場には兄の墓を準備できなかった都合で、その代わりの埋葬地としてアーサーが選んだのもこの僻地である。おそらく、もっとも地上に近い位置にある墓地だ。そういったところを考えると、事件直後には既にアーサーは地上に降りることを決意していたようにも思える。都市部からこのブリッジフォードの転送装置に向かえば、自然に通る道の少し脇にある小さな墓地。そこがバ

イスの遺骨の寝床である。

案の定、プロテスタントと別れたあと、アーサーはその足で兄の墓前へと赴いた。生前の名声とはかけ離れた、質素な墓石である。名は彫らなかった。何せ世論が荒れた時期に建てた墓であったから、その所在などを知られるのを敬遠した。静かに眠らせてやりたかったのだ。ただ「愛する兄」とだけ彫られたその墓石に向き合い、アーサーはつぶやいた。

「本日より、任務に復帰いたします…。隊長…。」

彼が自分に課した任務、それは緋石の奪還と赤い悪魔の拿捕である。

数十分後、アーサーは厳戒態勢の中、転送装置をくぐる。この瞬間、刑の執行はすべて完了し、彼は追放天使となりて地上に降り立ったのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0750p/

緋石物語

2010年11月30日07時02分発行